

火星



平成19年1月号

七曜抄

(四)

山尾玉藻

黒松のくろ赤松のあか立冬

ロマンスシートせつせつと蜜柑食ぶ

笥迫の胸をぬらせし初しぐれ

綿虫のゐし聖護院大根畑

梟のきもちのわかるマント着て

梟とかかはりゐたるイヤリング

おもしろうなりゆくところ枯蓮

ビニールのスリッパひびき芝生枯る

愛染明王忘年を灯されて

初夢の毛馬の堤の長かりし

第十二回火星賞

大 山 文 子

平成十八年度の火星賞を右の通り決定
致しました。

平成十九年一月

火星俳句会主宰

山 尾 玉 藻

推薦の言葉

謝らぬ母の足拭く良夜かな
鳥の巢の下のポストに用のあり
聡明で堅実な文子さんの日常生活は誠に充実してい
る。主婦、母親、お姑さんの介護、且つ、火星の会計や
雑務をも手際良く処理される。何よりも俳句に向う姿勢
は真摯でパワフル、私は唯々瞠目するばかりである。

雨音に山羊の乳張る二月かな
春の雪地下鉄人夫入れ替る
満開の牡丹雨雲呼びにけり
季語がもつ本来の力をわきまえる力が頼もしい。この
力、多作多捨の修練以外には培えない。

一面の冬田の横の親子井
炎昼や大きなしつぽ過りたる
季語の力は勿論の事、省略の手法も確かである。
春泥の靴見えてゐる牛井屋
日雷安藤忠雄の家四角
対岸の煙の届く古巢かな
不易の句も流行の句も、心の眼を働かせた写生法より
成っており、実があり、真がある。

ふるさは砂が顔打つ石路の花
島根県海岸近くの故郷を詠んで、出色の一句である。
この原風景をもっと掘り下げて詠む事が、今後の課題で
あるうか。火星八〇〇号記念圭岳賞を見事受賞、文章も
よくし、フル活動であった。

太白星

柳生千枝子

ひとりなる自問自答の風冷ゆる
誰か来る登音通り過ぐ寒夜
枯れてゆく危惧あり人も草原も
夕映えの黄金の雲凍ててあり
ひとは皆本来独り霜の声
海眠る地球の果ての虚空とは
冬の海深き眠りの果てあらむ

杉浦典子

ななかまど滝の半ばの振れをり
湿原の上をゆつくり草の絮

三十羽のあとにはたくさん鴨来る
枝豆のとびしが笑ひはじめなり
ひとりづつ釣舟草へ水渡る
石落しより鴉見え秋の昼
櫛のなかを水の流るる十三夜

浜口高子

新月や二度目の爛に立ちあがる
棟上げの柱のほふ無月かな
天袋の開いてをりぬ十六夜
止椀のひとひらのもの月の膳
淋しさの丈に鬼の子下がり来し
空濠に水の道あり秋の蛇
山荘に箸割る音や十七夜

火星作品

山尾玉藻選

大和郡山

城

孝子

ここよりは花嫁あるく草の絮
秋の暮人のくちびる見てゐたり
手ぶらにてあるくふる里夕鷄
けふも降る女系の家の木の実かな
月の出の甘きにほひの稲架襖
人だかりの後ろを通る秋の暮
鳥渡る生ある限り夢を見て
「雷鳥」着くホームの見える秋の雨
釣人の道となりぬる葛の花
柿赤し鈴かねの音に蹴く野辺送
八朔の吉野かすりに奈良さらし
十月や松から杉からも風
夕ぐれの刈田の風とおもひをり

豊中

廣畑忠明

小池楨女

はなやかに社務所の中の冬用意
短夜に残す硯の水すこし
破蓮の駅で車掌の交替す
鶺鴒高音首にタオルの明智越
大文字の火床を跳べり蝨
母の杖泡立草に止まりたる
哲学の道ひいやりと真昼なる
割箸になぞる三山鶺鴒の晴
こほろぎの聞こゆる程に襖開け
眠くなる榎櫃のかたち接骨院
紙袋たたんで帰る月の客
太柱いつぽん欲しき月夜かな
木屋の香りにさとき飛蚊症
鶏の小屋のからつぽ萩は実に
音たてて木の葉吹かるる良夜かな
ぎんなんや澱まず澄まず神の水
二科展のあとの大きなオムライス

大和郡山
大山文子

八幡
米澤光子

西宮
丸山照子

選のあとに

山尾 玉藻

月光や枝一本を伐りてより

森 茂子

まさか月を見る為に木の枝を伐った訳ではあるまい。日頃よりうるさく感じていた枝を一本伐ったのである。ちよつとした空間であるが、そこから射す「月光」が一層澄明であることが、読み手には自ずと感じられる。「伐りてより」の端的な表現が大きな広がりを与えた。

ここよりは花嫁あるく草の絮
城 孝子

月の出や十賊の丈のそれぞれに

吉田 康子

田舎の結婚式の景であろう。家の門前まで昔のままの農道や畦が残っていて、車を横付けできない場合が多い。稲刈も済んで辺りが枯を深めゆく中、車から降りた花嫁が婚家までを静々と歩く景は、なんとも美しく懐かしい。打掛の裾が触れ「草の絮」が青空に舞い上がった。日本の美しい原風景がここにある。

「月の出」の頃は色々なものに長い影が生まれて、辺りが優しい景となる。硬質な「木賊」にも柔らかな影が生まれ始めたのである。「木賊の丈のそれぞれに」で、刈り取り前の木賊叢である事が明らかで、木賊の影の高低を美しく映像化する、巧みな表現と言える。

十月や松からも杉からも風
小池 楨女

稲刈の総出海光まみれなる

蘭定かず子

十月ともなれば大気に冷えを感じるようになる。まして、松や杉を抜けてくる風にはいかにも清澄感があり、確かな秋の到来を言外に伝えていると言えよう。「松からも杉からも風」は句跨りであるが、嬉しさから生まれた自然のリズム感のようで、好もしく思う。

「稲刈の総出」から、機械刈ではなく、日曜や祭日に行われる棚田の手刈の景であろうと思われる。好天の海の耀きが、その景をいよいよ明るく活気立たせている。ここにも日本の農耕生活の原風景がある。

大文字の火床を飛べり蝨
大山 文字

色鳥の喰ひこぼしける午後三時

長田 擘子

作者は、大文字焼の当日ではなく、全く別の日に「火床」を見られたのであろう。すると思いもよらずその火床を「蝨」が飛んだのである。送り火の日は身を潜めていた蝨も、今は日を浴びて嬉しそうである。作者はその事に小さな驚きを感じたのである。

食べ足りたのであろうか、庭木に来ていた小鳥が何かの実を零した。只それだけの一瞬の事実であるが、下五の「午後三時」の働きで一気に詩になった。眠気を誘うような穏かな昼時ならでは、誠の一齣である。(以下略)

恒星圈

金澤明子

白足袋の圭岳先生鰯雲
数珠玉を摘みて三人真面目なり
往く人に触れてきらりと夕芒
恥ぢらひの色の一刷き金木犀
無花果の熟れて母子の夕餉前

河崎尚子

不知火や網繰る胸にクルスかな
牛飼のもつこすに霧晴れゆける
天草のクルスの墓を鳥渡る
島宿の陶のマリヤに秋灯す
お急ぎの方お断りなる氷頭脛

柿赤し常のくすりにオブライト
松茸の一本のある日曜日
コスモスに鋏鳴らせる夫の墓
コスモスの色とりどりの道に入る
川越のさつまいも食ひ寝んとせむ

小林成子

音楽室に小太鼓積みである良夜
集会所に薬缶伏せあり花カンナ
葉鶏頭虫籠窓より覗きけり
背山より日の暮れやすき菊花展
行列の途切れに水の澄みにけり

坂口夫佐子

浜の砂握りこぼせば暮れ早し
短日の砂のトンネル海へ向く
竹林に肥料まく子の赤い羽根
そそぐ日にひたすらそよぐ草の花
かつぎ手のまだ現れぬ神輿かな

獅子座

山尾玉藻推薦

福西礼子

秋の雨待ちぼうけの碑濡らしをり
奈良町の楽人長屋小鳥来る
柿食うて大事にしたき命なり
予期もせぬ表彰受くる爽やかに

中野八重子

前田忍

雨止みし小草に月を待ちぬたり
手にふれてしづくす闇の山ごぼう
天心に月山荘の小さき句座
胸に掌をあて息吐けり月の膳

渡辺繁

中西みどり

悪なき日々在りけり彼岸花
理髪屋の鏡に映る菊の花
悠然として秋風の通りけり
コスモスに畦塞がれてしまひけり

垣岡暎子

今里満子

死に匂のとほに過ぎしと生身魂
鳥渡るなにはの宮の柱跡
枝豆をつまむ筵や村芝居
生れ処小鯔に問ひし秋の昼

乳牛の乳房にふれし草の絮
飛びたたと風待ち顔の蒲の絮
稲刈つて隣りが近くなりにけり
うしろ手に烏瓜下げ山下り来